



# BUSINESS VISION

BUREAU  
VERITAS

BUREAU VERITAS JAPAN CASE STUDY



10 August 2011

## ■ システム認証事業本部

### Case Study: 株式会社ラプロパック

創業者のノウハウ伝承のツールとして ISO9001 へ目をむけ、業界特有の環境に対するイメージを払拭するツールとして ISO14001 へ取り組んだ企業が、この双翼で海外への進出を図る。

株式会社ラプロパック

(本社)東京都足立区

(本社工場)埼玉県八潮市

<http://www.rapro.co.jp/>



2010年10月 ISO9001+ISO14001 認証取得  
(統合マネジメントシステム)

制汗剤やマスカラ・マニキュア、キッチン用品などを包んでいる透明なパッケージや、某プリンターメーカーの交換用インクカートリッジを包む黒いプラスチックパーッケージがある。この誰もが目にしたことがあるプラスチックのパッケージを製造しているのが、埼玉県八潮市に本社工場を置くラプロパックだ。パッケージ業界は基本的に B to Bであり、パッケージだけが一般消費者に売られることは少ない。だが、実は身近にある多くの商品を守る



パッケージやトレーをプラスチックのシートから成型し、開発から製造までのほとんどの工程を本社工場で一貫して行っている。

1984年創業、現在14名の従業員を抱えるラプロパックは、現在の羅山昌恩代表取締役がひとりで興した会社だ。アイデアマンで自身エンジニアである昌恩社長は、ハードディスクなど精密機械を輸送する際にしっかりガードできるパッケージ「CI-SHELL」を開発し世界パッケージコンテストでワールドスター賞を受賞、持てる技術力を駆使して会社を成長させてきた。

### 創業者のノウハウを確実に次世代へ引き継ぐために

昌恩社長により大きく成長してきたラプロパックだが、現在の取締役兼ゼネラルマネージャーである羅山和益氏へ引き継ぐことが社内では明言されている。引き継ぐにあたり、和益氏は、より発展するためには今まで明文化されてこなかった企業文化や技術、製造のノウハウなどを、より若い世代に引き継ぎやすい形で伝えていく必要があるだろうと考えた。この洗い出し作業を ISO 認証取得というプロセスを通じて行えないかと思ったのが、はじまりだったと言う。

根っからのエンジニア気質である昌恩社長は、自分の頭の中で考えて自分で製造することができる。社長ひとりの力によって業務が進んでいる文化が強い企業であったようだ。だがそれでは、社長がいなくなると存続できなくなってしまう。ISO という継続的改善、サステイナブルディベロップメントを目指すためには、ISO の要求事項に従い

#### ワールドスター賞を受賞した先進技術の結晶「CI-SHELL」



30cm 落下テストで全方向 75G 以下の衝撃に絶える、サーモフォーミング・パッケージ。ハードディスクや CD ドライブのような精密機械をしっかりガードします。





役割分担を明確にすることが、ひとつの強いヘッドからそれぞれのマネージャーへ権限委譲できるような組織を作ることに繋がるのではないかと考え、ISO 認証の取得に向けて舵を取った。

和益氏が以前に勤めていた企業では ISO9001(品質マネジメントシステム)および HACCP(Hazard Analysis and Critical Control Point:ハセップ)を取得しており、直接係わってはいないにしても ISO 認証に馴染みはあったそうだ。しかし、この ISO9001 にプラスして ISO14001(環境マネジメントシステム)にも目を向けたのは、業界独自の特性があった。「プラスチック業界は環境に関するイメージが対外的にあまり良くありません。」と言う和益氏は、ISO14001 を取得することでこのイメージを少しでも払拭するチャンスにできないかと考えた。また ISO9001 と ISO14001 には共通部分もあることから、創業からの企業体質を大きく変えようとするタイミングで、多少負荷が増えても思い切って同時に取り組むことを決断した。

### 実際に運用してみて～メリットと課題

ラプロパックは 2010 年 10 月に ISO 認証を取得してからもうすぐ 1 年目の維持審査を迎える。実際に 8 ヶ月間運用してみて、大きく変わった点や逆に苦勞している点など、率直な現在の心境を聞くことができた。

例えば、ISO 導入により部門マネージャーが、技術力の引継ぎを行うために意識をしてしっかりと記録を取るようになった。しかし、どうしても 14 名という小規模企業にとっては、管理するためのひとりひとりのコストや時間のウェイトが重くなってしまう。これに対して昌恩社長は、「早くこれが無意識の自然になってほしい」と言う。例えば、「クレーム問題に関して、ISO のマネジメントシステムはどのように処理をして次に発生しないようにつなげるか示してくれるが、その管理作業に時間がかかってしまってクレーム処理が遅れては本末転倒だ。」と話してくれた。継続的改善にはある程度の時間とコストがかかることは予想されており、これが無意識に時間をかけずにできるようになってほしいと今後に期待をかけていた。

新たなビジネスチャンスも広がっている。パッケージ業界ではニッチだからこそ小規模企業が乱立しており、コストが非常に大きなビジネスのウェイトを占めているのが現状で、どうしても価格競争になりがちである。一方で、同時に ISO9001+ISO14001 認証(統合マネジメントシステム)を取得したグループ会社であるパックプロ・ジャパンは、グローバルビジネスを目指す企業に対し真空成型によるトータルソリューションを提供している企業だが、同社は今年、ISO 認証取得をキッカケに大口のプロジェクトに参加することができたそうだ。今までは商社を介さないと取引できなかったような大手企業と、直接口座を開設することができたというのだ。今後顧客にしたい大手優良企業と対等に付き合い、商品やサービスを提供するために ISO 認証取得は大きなアドバンテージになることも十分認識したという。



羅山 和益取締役



# BUSINESS VISION

BUREAU  
VERITAS

BUREAU VERITAS JAPAN CASE STUDY



## 海外への展開～ISO 認証は海外へのスムーズな展開のパスポート

日本国内を中心にパッケージの開発製造を行っているラプロパックは、より発展成長するために、新たなマーケット拡大に積極的に取り組まなければならない局面を迎えている。タイと香港に協力会社をもっている同社だが、2010年12月には韓国のパッケージメーカーと業務提携を果たし、アジアのマーケットへの展開を進めている。前職でマレーシアに駐在していた経験を持つ和益氏は、このような海外進出を行う際、ISO 認証取得がグローバルスタンダードに沿って業務を遂行する企業であると評価されることを認識していた。ISO を軸にした品質管理や環境に対する取り組み、コンプライアンスへの取り組みにより、スムーズな海外展開が期待できると考えたこと

も、ISO 認証取得への背中を押したひとつだった。

実は、ISO 認証機関を外資系企業に絞ったのはこういった背景も大きく影響していた。「今後海外にビジネスを展開する上では海外で通用するブランド力に期待するだけでなく、国内外での解釈のコンセンサスが取れていて、いわゆるグローバルスタンダードにズレがないことが重要だと考えました。」規格解釈をグローバル規模でコントロールできている点が、複数の外資認証機関の中からビューローベリタスを選んだ1番の理由だと語ってくれた。



八潮本社工場

現段階では、ISO 運用に時間とコストがかかっており、継続的改善に向けてまだまだ模索段階にある同社だが、「年に1度の審査が、いい意味で従業員に緊張感を与え、審査でありながら間接的に気づきを与えてもらえる場として、構築したシステムについても一度見直すキッカケになってほしい。」最後にスポーツに擬え、「1回試合をすることは、普段練習をすることの何倍も効果があるのと同じだと思っています。」と締めくくった。

(2011年7月5日取材)